



平成23年度
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
年間事業報告書

YMFS

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

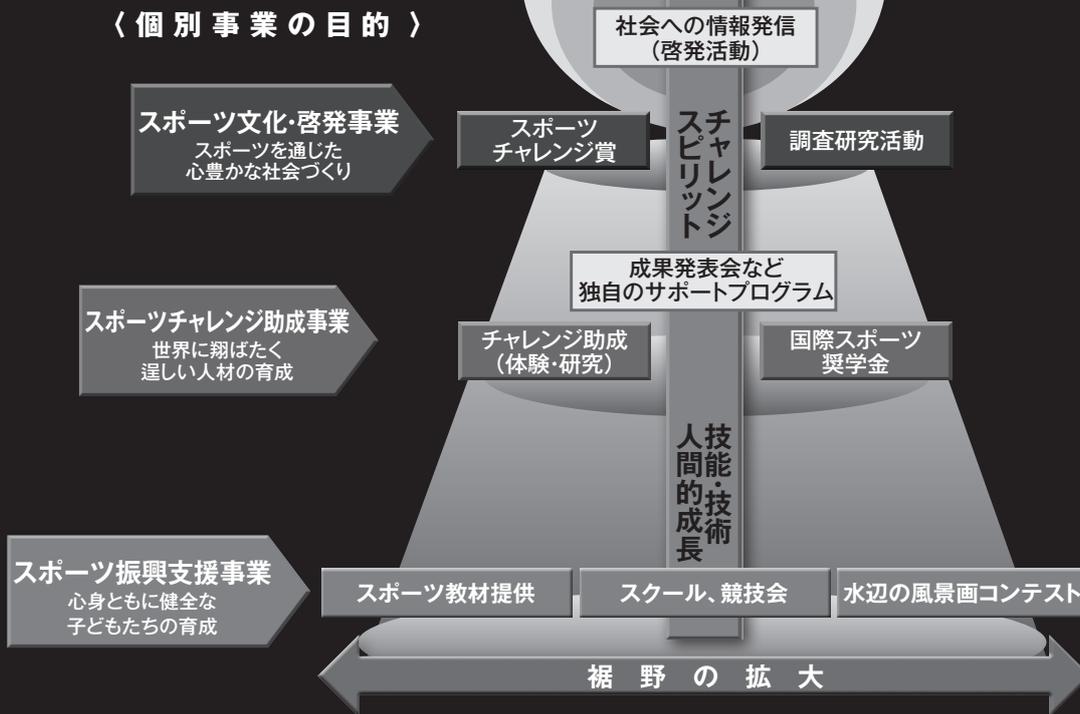
[財団目的]

「豊かな人間性涵養」に効果的なスポーツの振興および、
スポーツ文化向上による国家社会への貢献
チャレンジする尊さの訴求(チャレンジスピリットの喚起・醸成)

〈スポーツ振興の4要素〉



〈個別事業の目的〉



もくじ

平成23年度の事業を振り返って	P3
I 平成23年度 主な事業活動の報告	P4
①東日本大震災に関連する当財団の支援活動	
②「語り・学び・考える」3日間～YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング～	
③今後5年間の事業の方向性策定	
④年間事業活動の実績	
II 平成23年度 事業別の活動報告	P6
①スポーツチャレンジ助成事業	
②スポーツ振興支援事業	
③スポーツ文化・啓発事業	
④事業推進体制	
III 平成24年度の事業活動に向けて	P15
①中期事業方針「Next 5」の概要	

平成23年度の事業活動を振り返って

平成23年度（2011年4月～2012年3月）は、東日本大震災や福島原発事故の影響に加え、歴史的な円高や欧州財政危機、さらにタイ洪水被害など、人々の生活やそれを取り巻く社会・経済の根底を揺るがす大規模な災害や事象が発生しました。とりわけ3月11日に発生した東日本大震災では多くの尊い人命が失われるとともに国民生活にも未曾有の被害をもたらし、被災者をはじめ国民が受けた心痛や苦しさは計り知れません。また、震災発生後、国内外からのさまざまな救援・支援や、スポーツ関係者をはじめ多くのボランティアが被災地に駆けつけ支援の輪を広げるなど、復旧・復興の過程を通じて、日本人の助け合いの精神や社会の絆の大切さ、尊さをあらためて認識した一年でした。



こうした苦難のなかで、スポーツが果たした役割は決して小さくありませんでした。被災地の復興を物心両面で支援するスポーツ関係者の活動はもとより、FIFA女子ワールドカップにおける、なでしこジャパンの活躍と「最後まであきらめない精神」は、震災で消沈した日本はもちろん、世界中から大いなる共感と称賛を得るなど、選手の活躍が人々に夢や希望、感動を与え、スポーツの持つ力を実感するできごとでした。

一方、スポーツに関わる国の動きでは、50年ぶりにスポーツ振興法が改正され、スポーツ基本法の制定・施行や、その総合的かつ計画的推進のためのスポーツ基本計画が策定されるなど、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことができる社会づくりに向けた基盤整備が進められた一年でもありました。

こうした社会情勢の下に、平成23年度の当財団の事業活動は、関係各位のご協力を得ながら、着実にかつ円滑に運営することができました。主要事業の一つであるスポーツチャレンジ助成事業では、32名の体験、研究者、奨学生に助成するとともに、各種報告会等を通じて、相互刺激や異分野交流の機会を設けるなど、チャレンジャー（助成対象者）の人的成長をも促す取り組みを充実してきました。また、スポーツ振興支援事業の代表的な事業であるジュニアヨットスクール葉山では、セーリング技術の指導に加え、自然・水辺体験学習のプログラムを導入して2年目を迎え、今年度は特に防災に対する関心が高まるなか、地震・津波を想定した避難訓練や日常活動での安全管理の徹底に努めてきました。スポーツ文化・啓発事業では、これまでのスポーツ振興に尽力された「縁の下の力持ち」として2名のスポーツ写真家のチャレンジを表彰したほか、受賞者やチャレンジャーが目標に向かって取り組むその実像を広く社会に発信することで、「挑戦する心」の尊さをより多くの人々に知っていただく活動を行ってきました。

当財団は、平成23年度末で、設立後丸5年の節目を迎えました。これまで関係各位のご支援・ご協力により、各種事業活動の基盤も整ってきました。この5年間で生み出した成果や浮かび上がった課題などをあらためて整理・分析し、「事業の更なる質向上」と「新たな価値づくり」を基調とする中期事業方針（今後5年間の事業の方向性）も策定しました。平成24年度はこの方針に則り、より充実した事業活動の推進に努めてまいります。引き続きご指導をお願い申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団

理事長 木村 隆昭

I 平成23年度 主な事業活動の報告

1 東日本大震災に関連する当財団の支援活動

3月11日に発生した東日本大震災で被災した地域や人々に対し、復興支援の一助となるべく、以下のとおり支援活動を行いました。支援の方法や内容については当財団の特徴やネットワークを活かし、迅速かつ実効性の高い対応に努めました。

スポーツ教材および画材の支援

本年度は、平成19年度より毎年実施している「スポーツ教材の提供」を中止し、公益財団法人日本財団を通じて被災地の幼稚園、学校、避難所等へのスポーツ教材および画材の支援（第1次被災地支援）、文部科学省の「子どもの学び支援ポータルサイト」を通じたスポーツ教材の支援（第2次被災地支援）を行いました。



日本財団を通じて被災地の幼稚園、学校等にスポーツ教材と画材の支援を実施

■第1次被災地支援の概要

公益財団法人日本財団を通じ、サッカーボール(700個)、ドッジボール(700個)、長縄(500本)、クレヨン(12,000セット)、スケッチブック(12,000冊)の支援を行いました。実施にあたってはマルマン(株)とルフラン&ブルジョワ社の協力をいただき、4月20日と5月6日の2回に分けて発送を行いました。サッカーボールは南相馬市立原町第一小学校などに、画材は福島市立子山地区季節保育園などに届けられました。

■第2次被災地支援の概要

文部科学省が運営する「子どもの学び支援ポータルサイト」の情報をもとに東松島市教育委員会を通じてフットサルゴール(2セット)、ゴール用杭(10本)、ソフトサッカーボール(20個)、ゲームベスト(140枚)、跳び箱8段(4個)、セーフティマット(2枚)、逆上がり補助板(2台)、プラカード(10枚)、四輪ライン引き(1台)、電動空気入れ(1台)、水温計(1本)、レーキ(10本)、ボールキャリアー(2台)、デジタル握力計(2台)、ハードル(10台)、電子ホイッスル(2個)、プラホイッスル(6個)、システムストップウォッチ(2個)、システムプリンター(2個)を、大曲小学校ほか3校に支援しました。

被災地で活動するジュニアセーラーに対する支援

岩手、宮城、福島、茨城などで活動するセーリングクラブや高校ヨット部は、津波によりホームマリーナを失うなど甚大な被害を受けました。こうした地域のジュニア／ユース年代のセーラーを支援するため、当財団では直轄運営するジュニアヨットスクール葉山の「夏季合宿」(平成23年7月31日～8月2日/静岡県)に福島県のいわきジュニアヨットクラブから2名の小学生セーラーを招いたほか、平成24年3月26日～29日に静岡県で開催した「第20回セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖」では、被災地域からの参加者に輸送費の補助や参加費免除等の措置を設け、宮古ジュニアヨットセーリングクラブ(宮城県)、いわきジュニアヨットクラブ(福島県)、県立いわき海星高校ヨット部(福島県)から9名のセーラーや指導者が参加しました。



ジュニアヨットスクール葉山の夏季合宿に福島県から小学生セーラーが参加



被災地のジュニアセーラーに対し、セーリング・チャレンジカップへの出場を支援

I 平成23年度 主な事業活動の報告

2 「語り・学び・考える」3日間 ～YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング～

スポーツチャレンジ助成事業の年度を締めくくる行事、「YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」を実施しました。この催しは、OBを含む同制度の助成対象者（チャレンジャー）が一堂に会し、更なるチャレンジに向けて英気を養うことを目的に開催しているものです。平成23年度は、新たに「語り・学び・考える」というコンセプトのもとに、基調講演、スポーツ討論会、特別講演などを通じて、「高い視点」「広い視野」「深い思考」を養うことをテーマに実施しました。



3 今後5年間の事業の方向性策定

当財団は、平成23年度末で設立から5年の節目を迎えました。各種事業活動の基盤整備を進めたスタートの5年間から更に事業活動の充実をめざし、今後5年間の事業の方向性を示す中期事業方針「Next 5」を策定しました。内容骨子はP15をご覧ください。

これまでの5年間 平成18年11月～平成24年3月

これからの5年間 平成24年4月～平成29年3月

- 事業の基盤確立
(人的ネットワーク、システムなど)
- 公益法人認定
(平成21年4月)

- ①新たな価値づくり(社会的価値)
- ②事業の「質」の向上
- ③事業のシナジー強化

4 年間事業活動の実績

平成23年度は、スポーツチャレンジ助成事業、スポーツ振興支援事業、スポーツ文化・啓発事業の各種事業活動について、下記のとおり実施しました。詳しくはP6からの事業別の活動報告をご覧ください。

平成23年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
財団運営	■第1回理事会(19日) ■年間事業報告書発行		■評議員会(3日) ■内閣府 報告					■第2回理事会(24日)				■第3回理事会(27日)
事業関連	■エリア別報告会 ■平成22年度修了式 ■平成23年度助成金交付 ■審査委員特別賞表彰		← 中間報告会(計7回実施) →					← 第6期生募集 →		■書類審査(8・9日) ■面接審査(23・24日)		■YSCM ※1(16～18日)
	第1次被災地支援		第2次被災地支援		ジュニアヨットスクール葉山 スクール運営						■SCC ※2(26～29日)	
	全国児童 水辺の風景画コンテスト		募集		審査会		表彰式					
スポーツ文化・啓発	ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 ■第3回表彰式			← 第4回候補者推薦 →		← 第4回選考委員会(2回) →		■第4回表彰式				
情報発信・広報活動(リリース・会報誌発行) ウェブサイト更新												

※1 YSCM= YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング ※2 SCC= セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖

Ⅱ 平成23年度 事業別の活動報告

1 スポーツチャレンジ助成事業

スポーツチャレンジ助成事業は、スポーツを通じて自己の夢・目標にチャレンジするアスリートや指導者、研究者等の活動を助成する当財団の代表的な事業です。チャレンジャー自身による目標管理やその進捗を発表する報告会、また分野を超えた交流による刺激や発見を促す独自のプログラムにより、競技や研究の成果向上を促すとともに、社会にとって有用な遅い人材の育成をめざしています。

平成23年度は、OBを含む多数のチャレンジャーが顕著な成果を残すとともに、第6期生の募集を行い、新たに26人のチャレンジャーを迎えました。

平成23年度(第5期生)およびOBチャレンジャーによる主な活躍

スポーツチャレンジ助成の助成対象者は、5年間でのべ150人にのぼります。第5期生に加え、第1～4期のOBチャレンジャーが平成23年度に挙げた主な成果を紹介します。

体験5期生 春田純 陸上(障害者スポーツ)/選手
◆チャレンジテーマ：2012ロンドンパラリンピック出場
～日本人初の11秒台への挑戦～

5月14～15日に開催された「大分陸上2011」の100m(T44)に出場し、11秒95の日本新記録で優勝。T44クラスでは、日本人として初となる11秒台の好走で、春田選手にとっては目標の一つであった記録を達成した。



体験3期生 黒須成美 近代五種/選手
◆チャレンジテーマ：ロンドンオリンピックに向けて

5月19日に開催された「近代五種アジア選手権」(中国・成都)に出場し、ゴール直前の逆転劇で6位に入賞。この大会はロンドンオリンピック予選を兼ねており、黒須選手は目標としていたロンドンオリンピックの出場権を獲得した。



体験2期生 THE RIVER FACE レースラフティング/選手(チーム)
◆チャレンジテーマ：ラフティングの世界大会で優勝をめざす

10月4～11日に開催された6人制レースラフティングの世界大会「2011世界ラフティング選手権」(コスタリカ)に日本女子代表チームとして出場し、ダウンリバーで1位になるなどの活躍で準優勝。



体験4期生 副島正純 車いすマラソン(障害者スポーツ)/選手
◆チャレンジテーマ：ロンドンパラリンピックへの挑戦
～IPC世界陸上選手権大会出場とメダルの獲得～

10月30日に開催された「第31回大分国際車いすマラソン大会」に出場し、総合3位でフィニッシュ。この大会はロンドンパラリンピックの日本代表選考を兼ねており、国内選手で2番目の成績を挙げた副島選手のパラリンピック出場が決まった。



研究1期生 広島大学大学院 身体運動心理学研究室
◆チャレンジテーマ：心理的プレッシャーによってなぜ運動パフォーマンスが低下するか?—認知的側面と行動的側面の影響—

代表者・田中美吏氏(現・帝塚山大学所属)の助成対象研究、「The influence of monetary reward and punishment on psychological, behavioral and performance aspects of a golf putting task」が、国際誌「Human Movement Science」に原著論文として受諾され、電子版で早期公開された。



研究1期生 順天堂大学 スポーツ健康医科学研究所 運動生理学研究室
◆チャレンジテーマ：日本人におけるACTN3遺伝子型と筋繊維組成の関わり
～ACTN3遺伝子型はタレント発掘のツールとなり得るか?～

代表者・小倉裕司氏(現・聖マリアンナ医科大学所属)が取り組んだ助成対象研究の一つ、「Effects of ageing and endurance exercise training on alpha-actinin isoforms in rat plantaris muscle」が、Acta Physiologica Volume 202, Issue 4, pages 683-690, August 2011に原著論文として掲載された。



研究5期生 家光素行(立命館大学)
◆チャレンジテーマ：性ステロイドホルモンの増大が生活習慣病を改善させるか?

家光素行氏が取り組んだ助成対象研究の一つ、「Increased muscular dehydroepiandrosterone levels are associated with improved hyperglycemia in obese rats」が、American journal of physiologyに原著論文として掲載された。



国際スポーツ奨学金4期生 林勝龍(早稲田大学)
◆チャレンジテーマ：日本統治下における台湾野球の文化研究

林勝龍氏が取り組んだ研究、「嘉義精神の創造 — 日本統治下における嘉義農林学校野球部のアイデンティティ —」が、スポーツ人類学研究第12号に原著論文として掲載された。

研究5期生 溝口紀子(静岡文化芸術大学)
◆チャレンジテーマ：女子柔術・柔道における歴史社会学的研究

溝口紀子氏が取り組んだ助成対象研究の一つ、「なぜ日本にだけ柔道事故が起こるのか」を論じた研究論文が、フランス・スポーツ誌「レキップマガジン」(2011年9月3日号)に原著論文として掲載された。



研究3期生 林直亨(九州大学)
◆チャレンジテーマ：運動中の眼底血流量変化を記録する試み
— 運動時の視覚調節機構解明への手がかり —

林直亨氏が取り組んだ助成対象研究、「Changes in ocular flow induced by hypo- and hypercapnia relate to static visual acuity in humans Naoyuki Hayashi, Tsukasa Ikemura, Nami Someya」が、「Eye Reports」に原著論文として掲載された。



Ⅱ 平成23年度 事業別の活動報告

チャレンジャーに対する年間サポート・プログラムの拡充

当財団では、助成対象者に対して助成金の交付に加え、年間を通じた独自のサポートを行っています。現状と目標のギャップを明確にし、そのギャップを埋めるための課題と取り組みを自ら掲げ、四半期ごとの報告書提出と中間報告会での発表、さらに年度末に開催する「YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」では成果発表を行うとともに、分野を超えた交流機会を設けることで互いの研鑽を促しています。

平成23年度は、東日本大震災の影響で中止となった平成22年度成果発表会の代替としてエリア別報告会を東京、静岡、大阪で計5回、中間報告会を計7回実施、3月16日～18日には静岡県で「第5回 YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」を開催し、OBを含む36人のチャレンジャーが年間報告を行いました。

■平成22年度エリア別報告会

東日本大震災の影響で中止となった成果発表会の代替として、エリア別報告会を各地で5回開催しました。この報告会で発表を行ったチャレンジャーの中から、顕著な成果を残した体験2期生のTHE RIVER FACE(レースラフティング/選手・チーム)が審査委員特別賞を、研究4期生の三浦哲都氏が特別チャレンジャー賞を受賞しました。

■平成23年度中間報告会

7月から11月にかけて計7回の中間報告会を実施しました。各チャレンジャーから活動の進捗報告が行われたほか、浅見俊雄審査委員長をはじめとする審査委員から激励やアドバイスが贈られました。また、分野を超えた交流の場として、「災害時にスポーツは何ができるのか?」「サプリメントについて考える」等をテーマにスポーツ討論会を実施し、活発な意見交換を行いました。



■第5回YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング

これまで「YMFSスポーツ・チャレンジ・ウィーク」として実施してきた年度末の成果発表会を、内容の拡充とともに「YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」と改称し、3月16～18日、静岡県掛川市のヤマハリゾートつま恋で実施しました。この会場で年間報告を行ったチャレンジャーの中から、顕著な成果を残した溝口紀子氏(研究5期生)と、金ウンビ氏(外国人留學生奨学金4期生)に特別チャレンジャー賞が贈られました。

また、「語り・学び・考える3日間」をテーマにチャレンジャーの成長を促すさまざまなプログラムを組み、新たな試みとして下記の講演・討論会を実施しました。

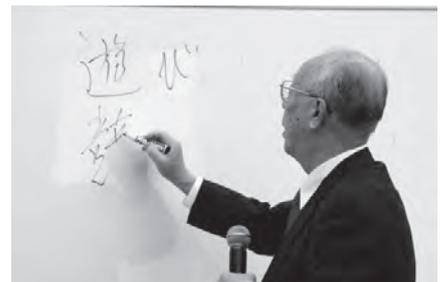
- (1) スポーツをさまざまな側面から眺め、その本質について考える「基調講演」(浅見俊雄先生)
- (2) 社会におけるスポーツの存在について討議する「スポーツ討論会」(杉本龍勇先生)
- (3) 異分野の知識や発想に触れ、新たな視点を養い成長のヒントをつかむ「特別講演」(内田伸哉氏)



チャレンジ成果を報告する成果発表会



スポーツチャレンジ助成5期生修了式



浅見俊雄先生による基調講演



スポーツ討論会では研究者と競技者がともに議論



異分野から知識や発想を学んだ特別講演



成果発表会では審査委員からのアドバイスも

II

平成23年度 事業別の活動報告

平成24年度(第6期生)の募集と決定

スポーツチャレンジ助成および国際スポーツ奨学金の平成24年度(第6期生)の募集を行い、書類選考による1次審査と面接による2次審査を経て、下記のとおり決定しました。6期生に対する助成金贈呈書授与式は、3月16日、YMFSスポーツチャレンジャーズ・ミーティングの初日に実施しました。



■ 応募状況/助成実績

区分	募集期間	応募数	採択数	助成金額(計)
体験助成	9月1日	53	10	890万円
研究助成	～	97	12	1,130万円
国際スポーツ奨学金	11月15日	17	4	480万円(1年分)
合計				2,500万円

■ 参考: 応募件数推移

区分	第1期生	第2期生	第3期生	第4期生	第5期生	第6期生(前年比)
体験助成	74	29	46	46	48	53(110%)
研究助成	101	65	75	84	90	97(108%)
国際スポーツ奨学金	16	23	17	20	13	17(131%)
合計	191	117	138	150	151	167(111%)

■ 第6期生助成対象者一覧 平成24年2月27日現在

体験助成		
氏名	テーマ	所属
小野塚 隆	世界にチャレンジできるラグビー女子レフリーの養成	ラグビー審判/指導者
酒井 裕唯	ショートトラックスピードスケートの世界大会で、常にメダルを獲得できる力を身につける	スケート/選手
佐藤 圭太	ロンドンパラリンピック出場及び決勝進出への挑戦	陸上・障害者/選手
田井小百合	デフリンピック陸上競技100mハードルで金メダル獲得をめざす — 聴覚障がい母の挑戦 —	陸上・障害者/選手
椿 浩平	トライアスロン競技で金メダル獲得をめざす ～努力によって目標を成し遂げられることを伝えたい～	トライアスロン/選手
平田 彩寧	五輪・W杯出場に向けての強化活動と女子ラグビー普及	ラグビー/選手
星 瑞枝	2014冬季ソチオリンピック女子アルペンスキー競技で日本人初の金メダル獲得	アルペンスキー/選手
細川 孝介	スノーボードでオリンピックに出場 ～メダルを獲得して、夢と希望、そして楽しさを伝える～	スノーボード/選手
山崎 勇喜	ロンドン・リオ五輪50km競歩における入賞及びメダル獲得	陸上・競歩/選手
湯浅 菜月	エアライフルで2016年リオ五輪出場 ～400点満射への挑戦～	エアライフル/選手
研究助成		
氏名	テーマ	所属
牛山 潤一	運動皮質-筋間の活動連関のメリットとデメリット	慶應義塾大学 医学部 リハビリテーション医学教室 特任教授
門田 浩二	スポーツ選手の素早い反応を制御する視覚運動情報処理メカニズムの解明	大阪大学大学院 医学系研究科 助教
佐藤 幸治	ヒト骨格筋における運動、食事が性ステロイドホルモン合成に与える影響	立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構 ポストドクトラルフェロー
寒川 美奈	筋腱機能に着目したダイナミックストレッチングの有効性に関する検証	北海道大学大学院 保健科学研究院 助教
鈴木 浩太	運動嫌いの子どもへの科学的支援 — 反応モニタリングによる運動機能の向上を目指して —	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 知的障害研究部 科研費研究員
須藤みず紀	糖尿病性筋萎縮における運動療法とエピジェネティクスな遺伝子発現調節の解明	福岡大学 スポーツ科学部 身体活動研究所 博士研究員
瀬戸 邦弘	沖縄諸島における民族綱引き文化の観光化利用とその伝統保護に関する動態研究	上智大学 文学部 常勤嘱託講師
角川 隆明	競泳選手の競技力向上に向けた流体力学的な泳パフォーマンス評価法確立への試み	筑波大学大学院 人間総合科学研究科 博士課程1年
福谷 充輝	身体運動中のアキレス腱長の生体計測法の確立 スポーツ動作中のパワー発揮メカニズム解明に向けて	早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科 博士後期課程2年
松生 香里	陸上競技長距離選手における腸内環境およびsigA変化とコンディショニングの関連	立命館大学 スポーツ健康科学部 助教
行實 鉄平	メディカル・フィットネス施設による地域スポーツ環境の構築 ～大学・医療・行政・住民組織の連携を通して～	徳島大学大学院 ソシオアーツアンドサイエンス研究部 講師
吉武 康栄	スポーツパフォーマンス中に発現する下肢—上肢の動作投影の様相と神経生理学的メカニズムの解明	鹿屋体育大学 スポーツ生命科学係 准教授
国際スポーツ奨学金		
氏名	テーマ	留学先/国籍
佐藤 潤一	国際スポーツ競技大会におけるメディア・コミュニケーション戦略に関する研究	イギリス
中田 貴央	オランダの医学的な視点から、男子サッカー日本代表のワールドカップ優勝に貢献するための土台を学ぶ	オランダ
金 ウンビ	体操の効果のエビデンス検証とその実践的活用による地域(被災地)の人々の心身の健康増進への貢献	韓国
フィグロアゴンザレス イポリトラファエル	後期高齢者用のADL(日常生活動作)年齢算出式の開発	メキシコ

Ⅱ 平成23年度 事業別の活動報告



第6期生選考の審査会



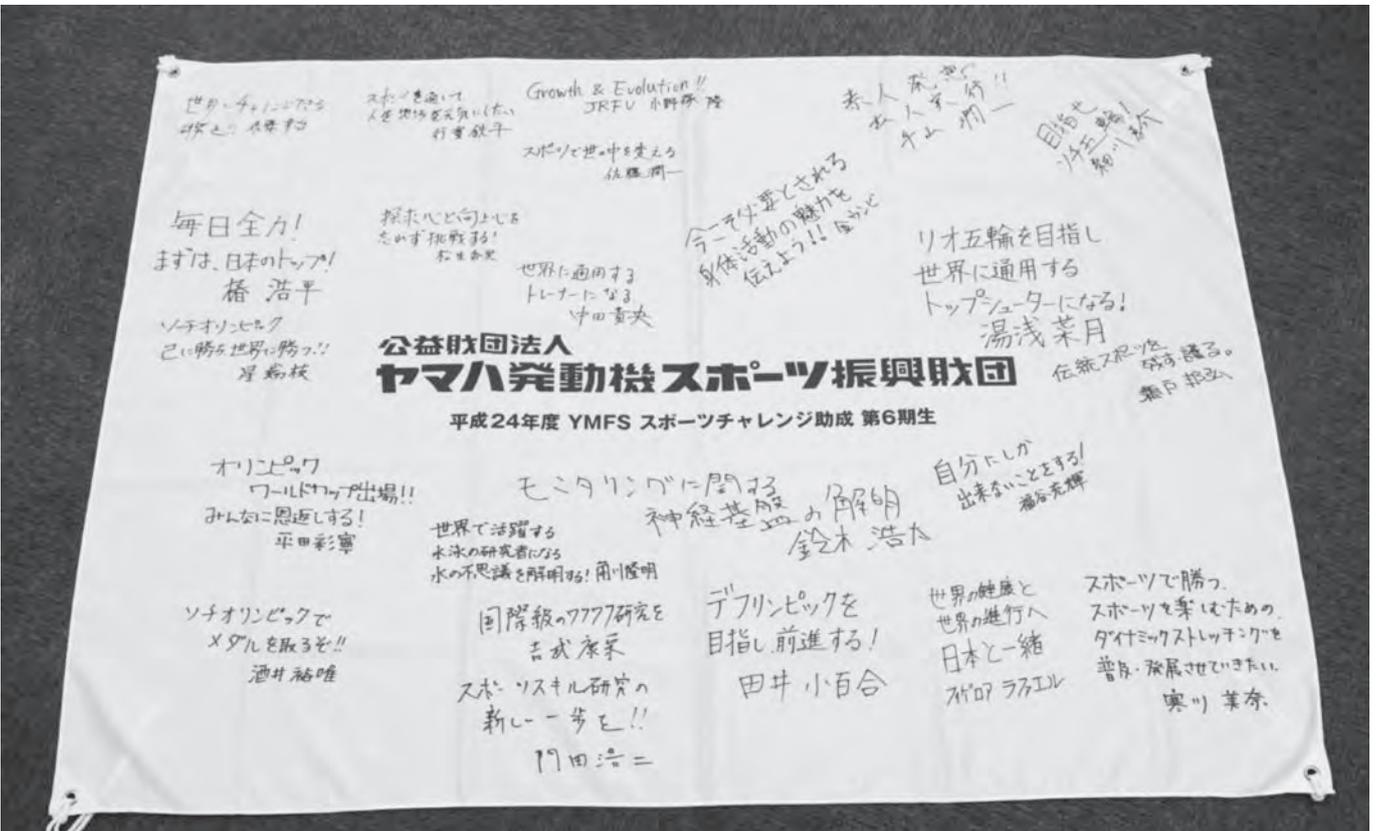
第6期生助成金贈呈式



第6期生代表による決意表明



第6期生を迎えるの交流会



第6期生の決意が記されたフラッグ

Ⅱ 平成23年度 事業別の活動報告

2 スポーツ振興支援事業

スポーツ振興支援事業は、心身ともに健全な子どもたちの育成をめざし、スポーツ環境整備のための支援をはじめ、スクールおよび大会等の開催を通じて競技力向上支援を行うものです。また、事業活動を通じて獲得した成果の社会還元にも取り組んでいます。

ジュニアヨットスクール葉山の運営

「ジュニアヨットスクール葉山」では、スクール運営指針の核となる「心身ともに健全な逞しい人材の育成」「チームリーダーを育成」「グローバルな人材の育成」という狙いを具現化するために、葉山マリーナをベースとした従来のセーリングスポーツ指導に加え、平成22年度より各種の自然・水辺体験活動を積極的に展開しています。2年目となる平成23年度も「水辺の安全学習」や「水辺体験学習」等を実施し、子どもたちの育成に努めました。

また平成23年度は、レーシングクラスのスクール生（高校3年生）がユース日本代表選手に選出され、イギリスで開かれたユース世界選手権に出場したのに加え、ジュニアのスクール生（小学校4年生）がタイのセーリング合宿に参加するなど、国際的な活躍や交流が進みました。

■水辺の安全学習

日本ライフセービング協会の指導による「水辺の安全学習」を、7月3日(座学)と17日(実技)に、葉山マリーナおよび森戸海岸で実施しました。また、防災意識が高まるなか、5月1日にはスクール開講中の地震・津波を想定した避難訓練を実施しました。



■自然・水辺体験学習

(ラフティング、トレッキング、伊豆大島外洋帆走訓練、等)
夏季合宿の最終日にはカヌーやラフティング、川トレッキングを実施したほか、夏休み後半には2泊3日で伊豆大島への外洋帆走訓練を行いました。



■セーリング練習／夏季合宿

月に2～4回のセーリング練習では、風の力でヨットを走らせるセーリングの魅力を体感しながら、操船の基本技術からレース参加に必要な応用技術まで、クラスや個々のレベルに合わせて指導を行いました。また、7月31日～8月3日には静岡県・浜名湖で3泊4日の夏季合宿を行い、春から夏にかけて学んだ技術をさらに高めるとともに、座学ではスポーツ栄養学の基礎を学び、共同生活の体験を通してチームワークやリーダーシップを身につけました。



■競技会への参加

年間を通じ、葉山近郊で開催された各種大会に参加し、競い合うことで互いの技術向上や課題の確認等を行いました。

■保護者への成長報告

体力測定や技能検定、さらに日々の練習に対する取り組みや成長記録を保護者に報告し、家族間でのコミュニケーションに活かす試みを行いました。また、3月11日に実施した修了式では、スクール生と保護者に対する年間報告を行いました。

Ⅱ 平成23年度 事業別の活動報告

第20回セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖の開催



国内におけるジュニア／ユースセーラーの最高峰の大会「第20回セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖」を、3月26日～29日に静岡県浜松市の県立三ヶ日青年の家を会場に開催しました。今大会には岩手県や福島県を含む



全国28クラブから77隻・87人の選手が出場し、熱戦を繰り広げました。

第23回「全国児童 水辺の風景画コンテスト」の実施

第23回「全国児童 水辺の風景画コンテスト」では、「水辺で発見・体験したことや学んだこと」、「水辺の仕事や乗り物」、「水辺で見た景色」、「水辺に棲む生き物」をテーマに、小学生以下の児童を対象に作品を募集し、全国各地の幼稚園、保育園、小学校、絵画教室などから合計6,472点（昨年8,307点）の作品が寄せられました。幼児からの応募が徐々に増えており、学校や幼稚園・保育園で、水辺の体験行事などに積極的に取り組んでいる様子うかがえました。

平成23年度は、入選作品を選出する予選会を10月18日に、本選会を10月25日に開催し、工藤和男審査員長をはじめとする11名の審査員によって「文部科学大臣賞」「国土交通大臣賞」「環境大臣賞」「農林水産大臣賞」各1点、「審査員長特別賞」1点、「金賞」6点、「銀賞」9点、「銅賞」15点、「特別賞」4点の入賞作品を選出しました。



スポーツ教材の提供

平成23年度は、全国の学校やスポーツ団体等にボール等を提供するスポーツ教材提供を中止し、東日本大震災で被災した地域への支援を行いました。詳しくはP4をご覧ください。

Ⅱ 平成23年度 事業別の活動報告

3 スポーツ文化・啓発事業

当財団では、これまでのスポーツ振興に尽力された「縁の下の力持ち」の表彰や、チャレンジャー（助成対象者など）が目標に向かって取り組むその実像を社会に発信することで、「挑戦する心」の尊さをより多くの人々に知っていただく活動を行っています。加えて平成23年度は、スポーツ討論会を実施しました。

第4回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞の実施

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」は、当財団のスポーツ文化・啓発事業の一つとして平成20年度より実施している表彰制度です。この賞は、自己の夢や目標に向かって自身を磨き上げた人物や団体（チーム）の「チャレンジそのもの」を称え、そのたゆまぬ努力のプロセスと成果に敬意を表するものです。

平成23年度（第4回）は、10月1日～11月15日の公募期間に、スポーツ団体や報道機関から10件の候補者推薦が寄せられ、2回の選考委員会を経て、下記のとおり功労賞2名を選出（奨励賞は該当なし）し、3月18日にヤマハリゾートつま恋（静岡県掛川市）で表彰式を行いました。

■第4回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞受賞者

功 労 賞	岸本 健 スポーツ写真家 株式会社フォート・キシモト 代表取締役社長	スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献 ～50年間で約800万点のスポーツの現場を記録～
	水谷 章人 スポーツ写真家 一般社団法人日本スポーツプレス協会 会長	独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力 ～スポーツグラフィックの新たな境地を拓く～



岸本健氏の代表作



水谷章人氏の代表作

■選考経緯：浅見俊雄選考委員長

この賞は競技団体、報道関係、財団関連からの推薦をもって選出しますが、「縁の下の力持ち」を対象としていることで毎回選考が難航します。奨励賞についてもいくつか推薦をいただきましたが、本年度における活躍という基準を満たす方がいなかったため見送りとなりました。一方、功労賞もいくつかの候補があり、そのなかでスポーツ写真家のお二人の名前があがりました。この分野でそびえ立つ両巨頭でありながら視点や表現方法が異なっていたことから、今回はお二人を同時に表彰することになりました。後進の育成を行うなど新しいチャレンジを続けている両氏ですが、この賞はこれまでの功績を讃えてのものです。



Ⅱ 平成23年度 事業別の活動報告

スポーツ討論会等の実施

エリア別報告会や中間報告会で助成対象者によるスポーツ討論会を開催したほか、YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングでは、浅見俊雄審査委員長による基調講演「スポーツってなんだろう?」、法政大学経済学部の杉本龍勇教授による「スポーツは本当に必要か?」をテーマとしたスポーツ討論会、内田伸哉氏による特別講演「チャレンジ精神～広告やエンタメの視点から～」を実施しました。



各種情報発信／広報活動の展開

各種事業活動から発生したデータや情報を広く社会に報告することや、チャレンジャー同士の交流を促進するため、デジタルメディアや出版物を用いた情報発信／広報活動を行いました。



ウェブサイト



チャレンジャー・ネットワーク



チャレンジャー会報誌



■メディア掲載件数 (平成23年4月1日～平成24年3月31日)

- ・新聞 : 24 件 (日本経済新聞社、中日新聞、静岡新聞など)
- ・雑誌・書籍 : 8 件 (月刊体育施設、コーチングクリニックなど)
- ・テレビ : 2 件 (NHK 高知放送局、高知さんさんテレビ)
- ・インターネット : 17 件 (日本体育科教育学会、Yahoo!ニュースなど)

4 事業推進体制 平成24年3月31日現在

役員 ※敬称略

評議員		
常・非常勤	氏名	現職
非常勤	岡崎 助一	公益財団法人日本体育協会 専務理事 (元文部省競技スポーツ課長)
非常勤	塩谷 立	衆議院議員
非常勤	柳澤 伯夫	城西国際大学 学長 (元衆議院議員)
非常勤	戸田 邦司	(財)日本海洋レジャー安全・振興協会 会長 (元運輸省海上技術安全局長)
非常勤	晝馬 明	浜松ホトニクス(株) 代表取締役社長
非常勤	武井 一浩	弁護士
非常勤	柳 弘之	ヤマハ発動機(株) 代表取締役社長
非常勤	清水 紀彦	ヤマハ発動機(株) 監査役
非常勤	西山 正樹	ヤマハ発動機(株) 顧問 (元警察庁中部管区警察局長)
非常勤	梶川 隆	ヤマハ発動機(株) 顧問
非常勤	大坪 豊生	ヤマハ発動機(株) 顧問
理事		
非常勤	木村 隆昭	当財団 理事長 ヤマハ発動機(株) 代表取締役専務執行役員
常勤	杉本 典彦	当財団 常務理事 事務局長兼任
非常勤	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
非常勤	伊坂 忠夫	立命館大学スポーツ健康科学部 教授 (副学部長)
非常勤	伊藤 宏	公益財団法人東京都体育協会 理事
非常勤	勝田 隆	筑波大学 客員教授 (仙台大学 教授)
非常勤	木沢 裕一	(株)電通 執行役員
非常勤	鈴木 大地	順天堂大学スポーツ健康科学部 准教授
非常勤	平 忠彦	タイラレーシング(株) 代表取締役 社長
非常勤	橋川 隆	(社)ウォーターフロント開発協会 理事 (元運輸省第三港湾建設局長)
非常勤	柳 敏晴	名桜大学人間健康学部 教授
非常勤	橋本 義明	ヤマハ発動機(株) 取締役上席執行役員
常勤	岸川 善次郎	当財団 前事務局長
監事		
非常勤	田宮 紳司	新日本有限責任監査法人 代表社員 公認会計士
非常勤	渡辺 政弥	ヤマハ発動機(株) 統合監査部 グループリーダー

全国児童・水辺の風景画コンテスト 審査員 ※敬称略

役職	氏名	現職
審査員長	工藤 和男	(社)創元会理事長、日展評議員 画伯
審査員	服部 謙司	(社)創元会会員、日展会友 画伯
審査員	釣谷 康	(社)日本舟艇工業会 専務理事
審査員	向江 政秋	一般社団法人日本マリーナ・ビーチ協会 事務局長
審査員	岡田 正文	NPO法人ジャパンゲームフィッシュ協会 事務局 事業部長
審査員	文部科学省、国土交通省、環境省、農林水産省	
審査員	鈴木 正典	ヤマハ発動機(株) 総務部 部長
審査員	杉本 典彦	当財団 常務理事 事務局長兼任

スポーツチャレンジ助成事業 審査委員 ※敬称略

体験助成		
役職	氏名	現職
審査委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
審査委員	西田 善夫	スポーツアナリスト (元NHK解説委員)
審査委員	ヨコゼタラシ	スポーツキャスター (元バレーボール選手)
審査委員	今給黎 教子	海洋スポーツインストラクター・冒険家
審査委員	村田 互	ラグビー7人制日本代表 監督
審査委員	大坪 豊生	ヤマハ発動機(株) 顧問
審査委員	岸川 善次郎	当財団 前事務局長
研究助成		
審査委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
審査委員	福永 哲夫	鹿屋体育大学 学長、東京大学 名誉教授
審査委員	伊坂 忠夫	立命館大学スポーツ健康科学部 教授 (副学部長)
審査委員	景山 一郎	日本大学生産工学部 教授
審査委員	草加 浩平	東京大学大学院工学系研究科 特任教授
審査委員	篠原 菊紀	諏訪東京理科大学共通教育センター 教授
審査委員	綿貫 茂喜	九州大学大学院芸術工学研究院 教授
審査委員	衛藤 隆	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所 副所長 東京大学 名誉教授
審査委員	遠藤 保子	立命館大学産業社会学部 教授
審査委員	川上 泰雄	早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
審査委員	小西 由里子	国際武道大学体育学部 教授
審査委員	定本 朋子	日本女子体育大学大学院研究科長・基礎体力研究所所長 教授
審査委員	田原 淳子	国士館大学体育学部 教授
審査委員	山本 裕二	名古屋大学総合保健体育科学センター 教授
審査委員	鈴木 正人	ヤマハ発動機(株) 顧問

ジュニアヨットスクール葉山 指導員 ※敬称略

クラス	担当コーチ
ベーシック/マスター	主任コーチ: 湯原浩一 (日本体育協会公認スポーツリーダー)
	コーチ: 町田和彦
	コーチ: 竹腰真紀子 (栄養士)
	コーチ: 上松慮生 (日本体育協会公認指導員)
	コーチ: 藤野恵梨香
エキスパート	コーチ: 清水大資 (日本体育協会公認コーチ)
	コーチ: 飛内航太
クラブ/レーシング	主任コーチ: 箱守康之 (校長、日本体育協会公認上級コーチ)
	コーチ: 松本健司 (日本体育協会公認指導員、コーチ)
体力測定・生活リズム指導	コーチ: 佐藤結香 (日本体育協会公認アスレティックトレーナー)

Ⅲ 平成24年度の事業活動に向けて

1 中期事業方針「Next 5」の概要

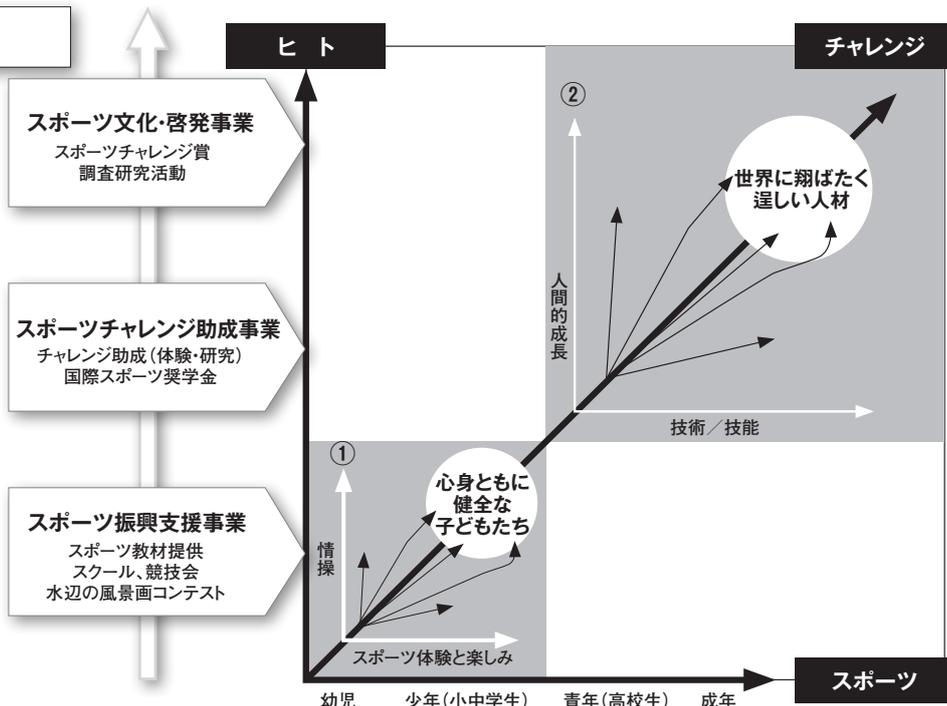
平成 23 年度末で設立から 5 年の節目を迎え、今後 5 年間の事業の方向性を示す中期事業方針「Next 5」を策定しました。

新たなステージの5年間へ

設立年度から平成 23 年度までの 5 年間は、人的ネットワークやシステムなど事業基盤の確立を進めつつ、公益性・独自性・存在価値を創出し、「社会に参加する」ステージと位置づけて事業活動を進めてきました。こうした基盤の上で、平成 24 年度からの 5 年間では各事業活動を持続的に発展させながら、より「社会に認められる」存在をめざした事業活動を推進していきます。

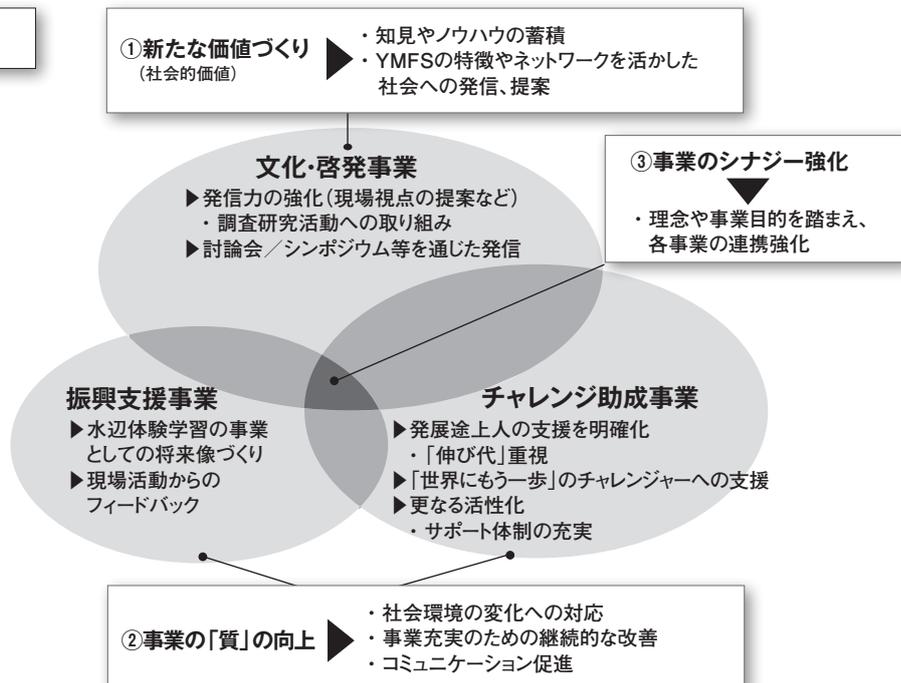
事業活動の指針

当財団のコアコンピタンスとして「人」「スポーツ」「チャレンジ」を成長軸に、①幼児期から少年期では情操の育みとスポーツ体験と楽しみの提供による《心身ともに健全な子どもたちの育成》を、②青年期から成年期では人間的成長と技術／技能向上の促進による《世界に飛ばたく逞しい人材の育成》をめざして、成長軸に沿った事業を展開します。



各事業の課題と見直しの視点

①新たな価値（社会的価値）づくり、②事業の「質」の向上、③事業のシナジー強化の3つの視点で事業活動を見直し、今後の課題を整理しました。



www.ymfs.jp

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

〒438-8501 静岡県磐田市新貝2500
Tel. 0538-32-9827 Fax. 0538-32-1112